



大すきいっぱい西北の子

～学びづくり、くらしづくり、仲間づくり～

令和7年1月14日
長崎市立西北小学校
文責：校長 江原芳樹
R6度 第9号

3学期の始まりを待つようにしてやってきた積雪も、葉を落とす樹々には大切な刺激だそうです。特に桜の木は、寒さを耐え越すことで、多くの花を咲かす力をもつことができるのか。

そう思いながら児童玄関横の桜の木を見てみると、静かさの中に凜とした姿が見えてきます。この桜の木は、アパート側へ枝を伸ばしていたため、昨年随分と枝を切りました。かなりの老木で、太い幹には腐食したところも見られます。それでもよくよく見てみると細い枝先には、小さな蕾の準備が始まっていました。

芽吹きどきの木には芽吹きどきのよさがあります。青葉若葉の木もいいし、紅葉もいいものです。しかし、葉という葉をふるい落とした裸木には、裸木の美しさがあると思います。自らの内にある春のいのちを育み、かばい、守り抜こうとする気構えのようなものでしょうか。

3学期がはじまりました。子どもたちの声に戻ってきた学校には、生き生きとしたエネルギーが満ちています。限られた時間の中で、それぞれの成長の実感をめざし、取り組んでいきたいと考えています。

内面の成長を

3学期の始業式で子どもたちへ話したことです。

「今年はへび年です。へびは、脱皮を繰り返しながら成長することから、永遠の生命や再生の象徴とされています。このへびの脱皮ですが、勝手に脱皮するわけではありません。内側にあるものがしっかりと成長することで、体の表面にある皮を脱ぐことができるのです。大切なことは、内側が成長するということです。私たち人間では、それを『内面』と言います。『心』や『人格』という言葉も当てはまるでしょう。私たち人間は、こうした『内面』や『心』、『人格』といったものが成長していかないと、新しい自分へ脱皮できないのです。」

そして、内面を成長させる一つの方法として、「お手本をもつこと」を提案しました。「あんな人になりたい」「こんなことができる人になりたい」、そうした思いを具体にするための「お手本」です。

私たち大人が、そうした「お手本」となっているのか、考えてみることも必要なのかもしれません。



家庭教育の土台の上に学校教育が生きていく

11月に行った学校評価アンケートには、多くの保護者の皆様からご回答いただきました。ありがとうございました。昨年より20%増の回答でした。多くの回答をいただ

いたことで、多様なご意見にも触れることができました。「厳しい意見が2～3割あるのが健全な傾向である」とあるアンケート委託業者が話していたことを記憶しています。西北小学校は、その意味においても健全な環境であると感じています。内容にしっかりと耳を傾け、今後の学校運営に生かしていきたいと考えます。

さて、ご意見の中で学校と家庭が共に歩調を合わせ、取り組んでいかなければならないと強く感じた内容が2つあります。「あいさつ」と「いじめ」への対応です。この2点は、家庭教育の力も大きく影響すると感じています。学校での指導よりも、家庭で「自分から挨拶をしようね。」「人に迷惑をかけないようにしよう。」「自分がされて嫌なことは、相手にもしないんだよ。」と言いつけられていること、また、私たち大人がそうした手本となっていることが、子どもの心に深く沁みわたると感じているからです。学校での指導は、その上で視点を与えながら指導することで効果が高まるのだと考えています。

学校教育は家庭教育を土台としています。土台が大きく、しっかりとしたものであれば、子どもは自らその土台に自分という人格を構築していくものです。学校教育は、そのとき効果を発揮していくのだろうと考えます。

学校で「いじめ」の事案が発生することは事実です。学校でも子どもを被害者にも加害者にもしないよう取り組んでいきます。ご家庭でも引き続き、子どもたちへの声かけをお願いしたいと思います。



3学期は次の学年への「0学期」

3学期は、今の学年の締めくくりというだけでなく、次の学年への「つなぎ」という意味があります。次の学年に確かな一歩を踏み出すためには、今の学年で付けるべき力が身に付いたのかを確認する必要があります。それは、学習面だけでなく、社会性としての生活面においてもそうです。

ご家庭で、この一年でどんな力が高まったのか、もう少し頑張るとさらに高まることはどんなことか、子どもたち一緒に考える機会を設けていただくと幸いです。

《校長散歩道 No. 19》

5年程前のお正月の時期のことです。

妻の実家のある諫早の食事処に寄った時、ちょうど両隣に、同じような家族構成の家族が入ってきました。おそらく大学生ぐらいだと思われる子どもがいて、帰省していたのでしょう。どちらの家族も両親とおばあちゃんが同席していました。その大学生と思われる子は、入店してきたときは、どちらも手に携帯（スマホ）をもっていました。

一方の子は、席に着くと同時に携帯をバッグに仕舞いましたが、一方の子は、変わらず携帯をいじったままでした。バッグに仕舞った子は、前に座ったおばあちゃんと久しぶりの会話を楽しんでいるようでした。しかし、携帯から目を離さない方の家族は会話もありません。

コミュニケーションツールとしての携帯（スマホ）が、目の前の大切な人とのコミュニケーションを妨げている、何とも象徴的な光景でした。